

「親のための応援塾」開催事業

教育庁社会教育課

【概要】

- 近年、家庭の教育力低下が指摘される中、子育てに不安や悩みを抱える親が自信を持って子育てができることを目指し、特に小学校入学前の親を対象に、平成 19 年度から「親のための応援塾」の開設を推進してきました。
- 親が気軽に参加でき、また、子育ての経験を活かしたものとするため、従来の行政主体の事業ではなく小学校 PTA を実施主体として事業を開始しました。平成 19 年度～21 年度のモデル事業を経て平成 22 年度には、京都府内全小学校で実施されました。事業の趣旨を広げるためニュースレターやパンフレットの作成、平成 21 年度からは、多くの保護者が参加される就学時検診や入学説明会等に合わせて「親のための応援塾」の開催を呼びかけるなどの改善を重ねてきました。
- その結果、現在では、府内すべての小学校 PTA で応援塾が開催され、参加者も増加、地域に定着した事業となっており、大きな成果をあげています。
- 今後は、すべての親が「親のための応援塾」に参加できるように更に工夫するとともに、行政が主体で実施するのではなく、親同士が教え合い学び合う「親のための応援塾」のスタイルを京都式の家庭教育支援の仕組みとして定着させることが課題であると考えています。

背景

◇ 家庭の教育力の低下

これまでは、おじいさん、おばあさんと一緒に暮らしていたり、地域社会のなかで同世代の子どもを持つ親が、日常的に子育ての悩みを相談したり、子育てのコツなどを交換し合うことが出来ていましたが、近年の少子化や核家族化の進展、共働き世代の増加などの生活スタイルの変化により、親が自信を持って子育てができにくくなっている状況があり、これが家庭の教育力の低下の一つの要因となっているのではないのでしょうか。

◇ 小学校入学前の子育てに不安や悩みを持つ親の増加

生活リズムが大きく変化する小学校入学を控えた子どもを持つ親は、大きな不安や悩みを抱えているということが P T A の会議でも話題となりました。

例えば、小学校までの通学はどうするのか、学校の給食はどんなものが出るのかなど、様々な悩みがあることが、アンケート調査を通して分かりました。

このような状況を踏まえ、

目的

親が自信を持って子育てが出来るよう、特に、親の不安や悩みが大きくなる小学校入学前の時期に焦点をあて、「親同士が語り合い学びあえる場を提供し、親同士のつながりをつくることにより、自信を持ち子育てが出来る環境の充実」を図り、

親の成長を通じて、家庭の教育力の向上を目指す効果的な事業の検討を始めました。

取組

◇ 身近なところで、子育て経験者の失敗談などの経験を活かせる事業展開に向けてこのような事業の在り方について、社会教育委員会議、京都府PTA協議会等の意見も聞きながら、検討を重ねてきました。

その中で、事業の実施に当たっては、

- ① これまでの行政が事業の内容を決めて事業を実施する方法ではなく、子育てをしてきた人の失敗や成功の経験を活かせる事業にすることが必要である。
- ② 親が気兼ねすることなく相談できるよう、身近なところで実施することが大切である。

といった多くの意見を踏まえ、京都府PTA協議会とも協議を重ねながら、各小学校PTAで主体的に実施してもらうことで、「親同士が語り合い、学び合う場をつくり、親同士のつながりをはぐくむ」事業として、平成19年度から小学校PTAの主体性を活かした家庭教育支援事業として「親のための応援塾」を開催することとなりました。

◇ それぞれの実施箇所の拡大と事業内容の充実に向けて

このようにして京都府PTA協議会と府教育委員会が協働し、「親のための応援塾」を開催することとなりましたが、新たな事業であるとともに、小学校PTAが主体となるというこれまでにない形態であるため、円滑に多くの小学校PTAで実施してもらえるよう、手軽に開催できるポイントをまとめたニュースレターやリーフレット「なんだかほっとした」「Let's Go! 応援塾」を作成し、PTAや学校に配布するなど開催箇所の拡大を図る工夫をしました。さらにPTAの研修会やステップアップセミナーなどの機会を利用し、アイスブレイキングやグループディスカッションをPTAの方々に実際に体験していただき、その手法を広めたり、先進的な実践の発表や、応援塾開催に関わる悩みや不安を出し合える機会を持ち、事業実施への支援を行ってきました。



◇ 事業への参加者の拡大に向けて

実施箇所の拡大と内容の充実とともに、「親のための応援塾」の存在を多くの親に知ってもらい、参加してもらえるよう、リーフレット「なんだかほっとした」や「LET'S GO 親のための応援塾」を作成し、幼稚園や保育園に配布するとともに、「親のための応援塾」の手法や事業の趣旨を理解してもらえるよう、ニュースターをとおして、取組の様子や参加者、主催者の声を広く紹介しました。

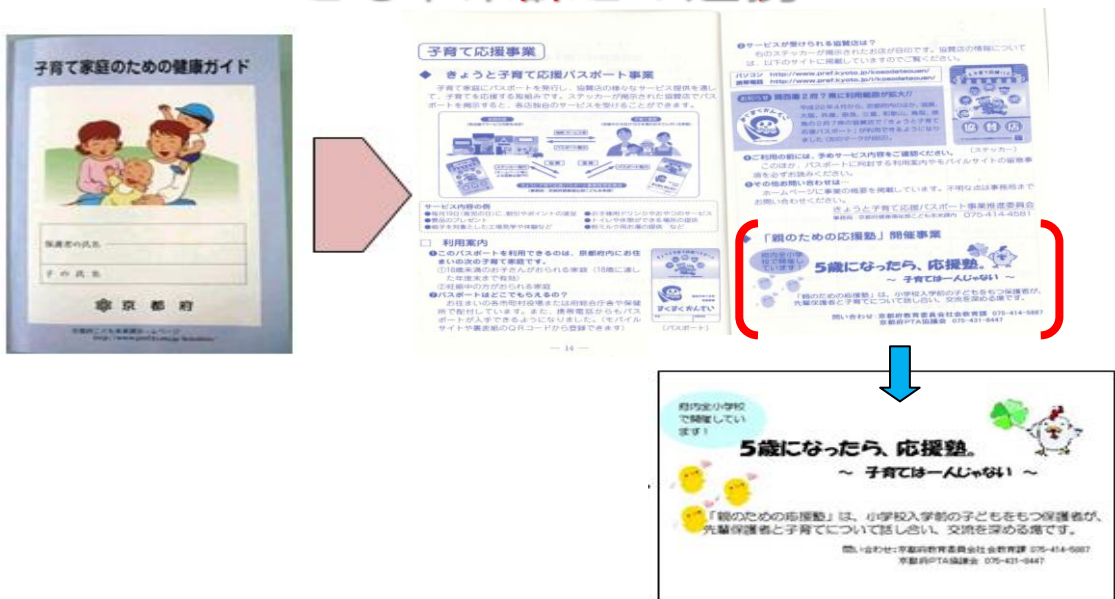
また、事業の趣旨の理解と、幼稚園、保育所からも応援塾への参加を呼びかけていただくよう保育協会、公立幼稚園長会、私立幼稚園連盟の総会で事業説明を行いました。

さらに、平成21年度からは、多くの保護者が参加される小学校の就学時検診や入学説明会と同じ日に「親のための応援塾」を開催してもらえるよう、各小学校PTAに働きかけるなど、すべての親が参加していただけるように改善を図ってきました。

平成22年度には「親のための応援塾」が継続的な事業となるよう、早くからより多くの親に事業の存在を知ってもらうため、保健所と連携し、新生児母子健康手帳とともに渡される「子育て家庭のための健康ガイド」に「親のための応援塾」の紹介を掲載してもらうなどの工夫を行いました。

事業の工夫改善 その1

こども未来課との連携



効果

このような取組の結果、

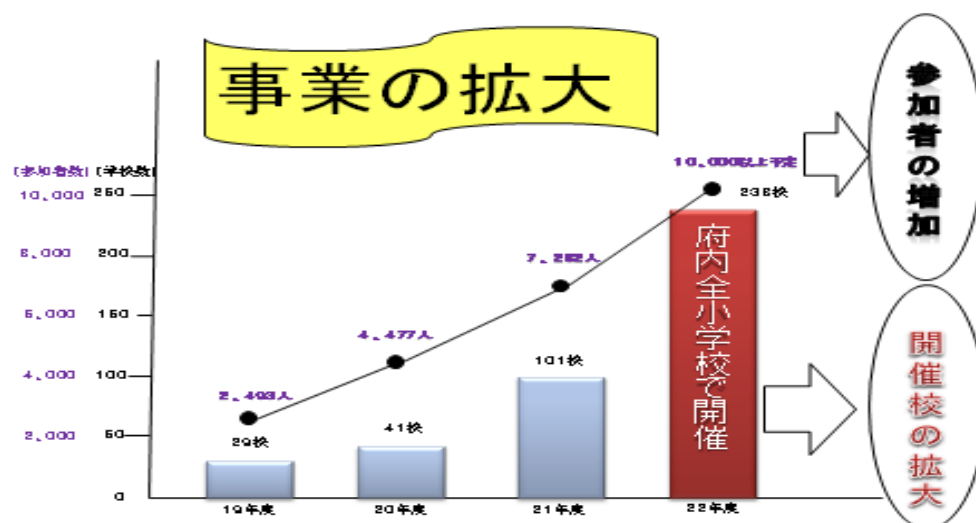
◇「親のための応援塾」の開催箇所及び参加人数の拡大

- 開催箇所

平成 19 年度 29 小学校 PTA →平成 22 年度 すべて(238)の小学校 PTA

- 参加者

平成 19 年度 2,493 名 → 平成 22 年度 10,000 名以上



◇事業の内容の充実

「親のための応援塾」の内容も、小学校PTAと就学前の子どもを持つ親が、子どもの学校生活に対する不安や日頃の悩みを相談するグループ交流会の開催だけでなく、例えば、忙しい朝でも、朝食をつくる工夫などを体験する、朝ごはんづくりや、多くの親が不安に感じている小学校の通学路体験など、様々なものが実施されてきており充実が図られています。

また、単に小学校PTAと就学前の子どもを持つ親だけの取組ではなく、小学校の施設見学や学校給食の試食など、小学校と連携した取組にも広がってきています。

グループ交流会



こども110番のいえスタンプラリー



朝ごはんづくり



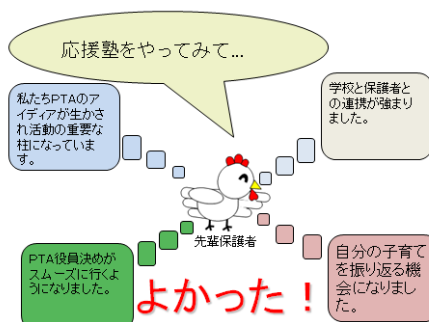
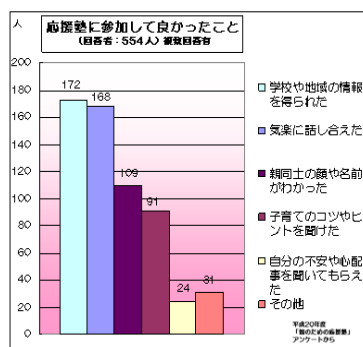
◇参加者及び実施主体の満足度

参加者アンケートの結果を見ると、「親のための応援塾」に参加したほぼ9割の親が、子育てのコツやヒントが聞けた、気軽に話し合えたなど、参加してよかったと回答しています。

(平成21年度「親のための応援塾」参加者アンケートによる)

また、実施主体である小学校PTAからも、「自らのアイデアが活かされ活動の重要

な要素になっている」「PTA役員の決定がスムーズに行われるようになった」という感想が寄せられ、「親のための応援塾」を通じて、参加した親と実施主体である小学校PTAの双方が事業の効果を実感し、事業の定着、発展が今後期待できます。



現在

◇小学校から他の校種への拡大

現在、府内のすべての小学校PTAで実施されるだけでなく、中学校7校、支援学校2校でも実施されるなど、他の校種にも応援塾の手法が拡大してきています。

振り返りと今後の課題

◇すべての親が安心して子どもの小学校入学を迎えられるように

このように、「親のための応援塾」は府内の各地域に定着し、参加者も年々増加してきていますが、就学前の子どもをもつすべての親が安心して、子どもを小学校に入学させることが出来るよう、参加者の更なる拡大に取り組むことが今後の課題です。

◇「親のための応援塾」スタイルを家庭教育支援の京都スタイルに

また、行政が主導で事業を実施するのではなく、親同士が教え合い、一緒に学ぶという

「親のための応援塾」のスタイルを、小学校入学前の子どもを持つ親の不安や悩みの解消を目的としたものだけでなく、家庭教育全般についての支援スタイルとしていくことが必要です。

平成24年にはここ京都府でPTAの全国大会が開催されることとなっており、「親のための応援塾」の事業スタイルを京都ならではの家庭教育支援として、全国に広く発信できるよう、更なる取組を推進していきたいと考えています。

企画総務課コメント

今年度の優秀賞を獲得した事業です。

子育て・子育ちへの不安感という府民ニーズを的確にとらえ、組織で事業を行うだけでなく、PTAの人材をうまく巻き込んでおり、実際に事業を実施しながらも常に府民ニーズの把握をし、事業の内容を改善していった点（開催日を就学前検診の日程にあわせる。通学路の体験を加えるなど）は非常に評価ができる点です。

今後の事業展開では、取組の実施主体がPTAに移っていくなどの住民が主体の取組へと進むことが期待できます。

また、PTAに止まらず、関係団体、京都府の他課、学校なども巻き込んでいったところは今後の広がりが期待できます。

今後の事業展開においても、ニーズ把握をしながら発展させていくことが大切です。